

## Ⅱ 研究報告

### 柳之御所遺跡等の発掘調査成果

(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 北村 忠昭  
(岩手県教育委員会平泉遺跡群調査事務所勤務)

#### 1. はじめに

柳之御所遺跡は北に高館跡、西に猫間が淵跡、東に北上川、南に北上川によって形成された氾濫原や沖積地に囲まれた範囲に所在しており、西側は猫間が淵を挟んで無量光院跡が位置している。

大規模な発掘調査開始からの20年間の成果を2009年に報告したが、その後方堀内部地区の発掘調査を継続し、その集大成として昨年度、堀内部地区の総括報告書をまとめることができた。また、今年も新たな発見があったことから、この10年間の発掘調査成果を中心に、これまでに分かってきた遺跡の状況を紹介したい。

#### 2. 調査の目的（課題設定）

柳之御所遺跡は、史跡公園としての整備及び保存活用を図るため、内容確認の発掘調査を継続して実施している。また、世界遺産の追加登録に向けて、考古学的な観点から中尊寺や無量光院跡等の周辺施設との関連の確認を行っている。その中で、この10年間の発掘調査の目的は大きく二つに分けられる。一つは、柳之御所遺跡を区画する2条の堀跡の延伸方向と周囲の遺構の分布状況、及び2条の堀跡の新旧関係と構築時期の確認である。もう一つは、堀内部地区から堀外部地区を通して中尊寺金色堂へ向かうと考えられている道路跡の延伸方向と周囲の遺構の分布状況、及び構築時期の確認である。

#### 3. 遺構

直近の10年間で新たに見つかった遺構は、掘立柱建物跡、堀跡、塀跡、橋跡（土橋跡）、道路跡、井戸跡などである。この期間の発掘調査は柳之御所遺跡を区画する2条の堀跡と、中尊寺金色堂へ向かうと考えられている道路跡の確認が主要な目的であったため、見つかった遺構も限られた。

**堀跡** 柳之御所遺跡を区画する2条の堀跡の確認を継続して行ってきた。第72次調査(2010年)で堀内部地区の最北端を発掘し、2条の堀跡を確認できたことから、北上川に面した東側を除き、これらの堀跡で区画されていることが分かった。これら2条の堀跡はこれまでと同様、内側の堀跡が外側の堀跡よりも規模が大きいことが確認されている。また、内側の堀跡と外側の堀跡には時間差があることが第69次調査(2008年)で指摘していたが、第76次調査(2014年)で検出した2条の堀跡に直交する溝によって内外の堀の前後関係が確認できた。



外側の堀跡（左）と内側の堀跡（右）

**橋跡** 新たに2箇所を確認された。一つは第75次調査(2013年)で見つかったもので、柳之御所遺跡と無量光院跡を繋ぐ位置にある。もう1つは第79次調査(2017年)で見つかった土橋であり、外側の堀から検出されている。中尊寺側への出入りに相当する位置にあたる。2箇所とも柳之御所遺跡と無量光院跡や中尊寺との関係に関連づける重要な遺構と言える。



柳之御所遺跡と無量光院跡を繋ぐ橋跡

**建物跡** 新しく確認された建物跡は第72次調査で見つかった掘立柱建物跡(72SB1)である。堀内部地区では最北端に位置する建物跡である。

**道路跡** 路面そのものではなく、両側の側溝が見つかっている。堀内部地区では第73次調査(2011年)で見つかった2条の溝が道路跡の可能性があると指摘しており、溝の間は約9mの平坦面で、堀外部地区で見つかっている道路跡につながる可能性がある。堀外部地区では2つの道路跡が見つかっている。第80次調査(2018年)ではこれまで確認されていた道路跡(道路跡1)の他に新たに道路跡と考えられる平行する溝(道路跡2)が見つかり、道路の作り替えが行われたことが分かった。これらの2つの道路跡は堀内部地区から堀外部地区を通り、中尊寺方向へ向かっており、中尊寺との関連が想定される。これらの道路跡がどの段階で構築されたか分かっていないが、今年度の第81次調査で道路跡2が道路跡1より古いことが判明した。



道路跡1(破線)と道路跡2(実線)

**塀跡** 堀外部地区で見つかった道路跡にはその両脇に塀跡を伴うことが確認されている。第81次調査では底面に板の痕跡が確認でき、板塀であったことが分かった。この塀跡は道路跡とセットになって周囲を画していたものと思われる。なお、堀内部地区では柱列による塀跡があったことも分かっている。

**整地層** 上記のような遺構ではないが、堀内部地区の内側の堀跡と外側の堀跡の間で整地層が確認されている。第77次調査(2015年)では外側の堀の造成と整地が同時期に行われていたことが分かり、堀で区画された時にその内側の一部では整地が行われていたことが判明した。整地の性格については明らかになっていない。

#### 4. 遺物

発掘調査で出土した遺物としては、土器類、土製品、石製品、木製品、金属製品、建物の壁などがあげられる。土器類にはかわらけ(土師器皿)、国産陶器(渥美、常滑、須恵器系、その他)、輸入陶磁器(白磁、青白磁、青磁、陶器)があり、木製品には折敷、曲物、漆器椀、下駄、形代、扇、弓、柱や屋根材などの建築部材がある。このように多様な遺物が出土しており、中でも特筆すべき遺物は、擬人化されたカエルが描かれた墨画折敷片(第74次調査(2012年)出土、左写真)と題籤軸木簡(第75次調査(2013年)出土、右写真)である。



## 5. 年代観

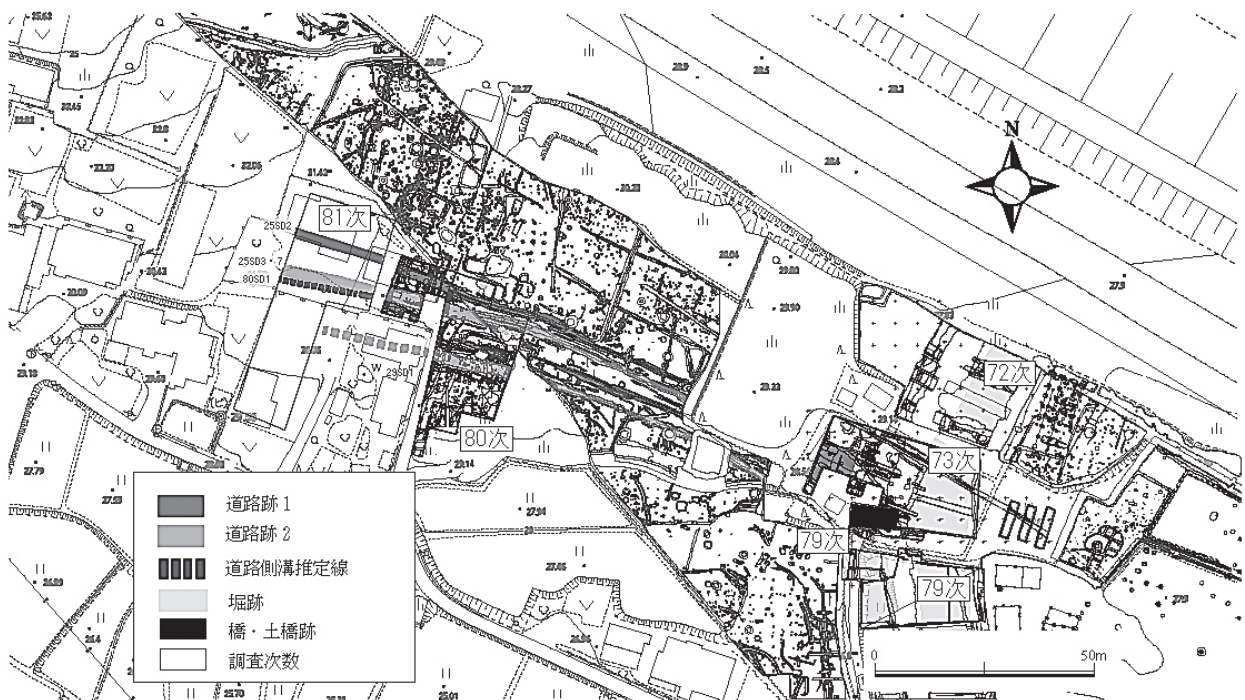
これまでの発掘調査の結果から、初代清衡の時代から奥州藤原氏の滅亡まで存続していたことが分かってきている。堀内部地区についても、3～5期に変遷する見通しが得られている。直近10年間の発掘調査に限ると、年代がはっきりしているのは12世紀後半には機能していた内側の堀跡と無量光院跡と関連づけられる橋状遺構である。外側の堀跡は内側の堀跡より古いことを確認しているが、詳細な時期は明らかになっていない。

## 6. 成果と課題

(1) 成果 大きく二つあげられる。一つは、柳之御所遺跡が北上川に面した東側を除き、堀跡で囲われていたこと、外側の堀跡と内側の堀跡には時間差があり、外側の堀跡が古いこと、内側の堀跡は少なくとも12世紀後半には機能していたこと、外堀が機能していたある時期に中尊寺方向への土橋が存在していたことなどである。もう一つは、堀内部地区から堀外部地区を通り、中尊寺方向へと向かう道路跡の続きが確認されたこと、その道路跡は大きく2時期にあり、新旧関係が確認されたこと、この道路跡には堀跡が伴うことである。この道路跡の延伸が確認されたことで、『吾妻鏡』に金色堂の「正方」にあったと記載される「平泉館」と中尊寺との結びつきがより強くなってくるといえる。当初の目的にはなかったが、題籤軸木簡の出土で行政文書の存在が確認され、柳之御所遺跡の機能を考える上で重要な発見となった。

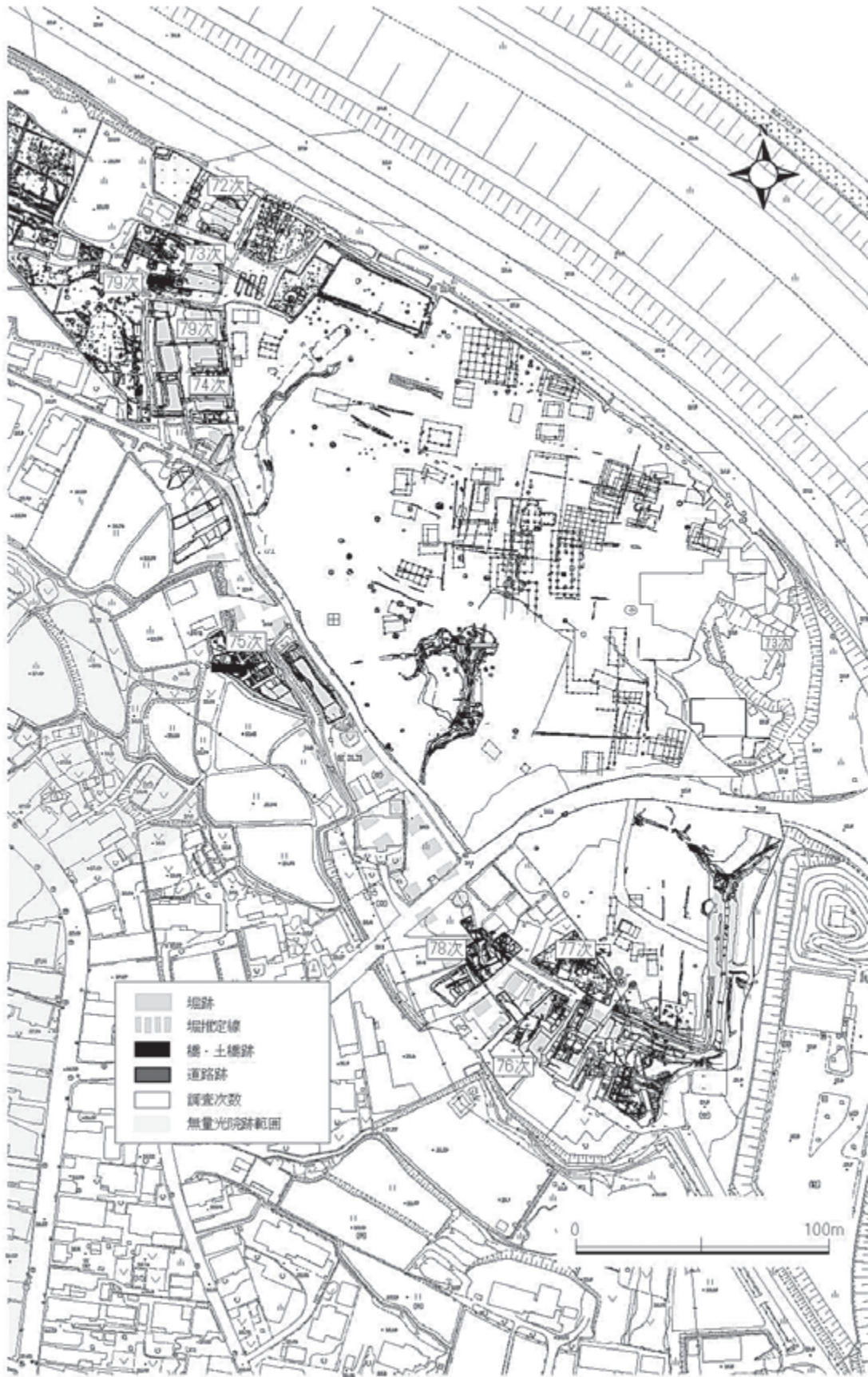
(2) 課題 ①堀外部地区や無量光院跡等の周辺への通路（橋）を確認すること。 ②中尊寺方向へ向かう道路跡の造営時期を明らかにすること。 ③堀外部地区の堀跡で区画された区域にどのような建物があつたのか明らかにすること。

以上の課題があるものの、今後も引き続き地道な調査や研究を行うことで、12世紀の平泉の様相が今後解明されることを期待している。



第80次・第81次調査区





第72次~79次調査区

# 世界遺産 一平泉と宇治一

京都造形芸術大学 杉本 宏

## 1. 浄土庭園伽藍のはじまりと平泉の浄土庭園伽藍

- ・律令体制の崩壊と浄土信仰の興隆
- ・平安仏教の顕密体制、貴族の現世安穩後世善処
- ・観無量寿経の世界と観想念仏
- ・聖地としての中尊寺
- ・藤原基衡創建の毛越寺（12世紀中頃、法勝寺を模範）
- ・藤原秀衡創建の無量光院（12世紀後半、宇治平等院を模す）

## 2. 京都・宇治の浄土庭園伽藍

- ・藤原道長創建の法成寺（一仏世界の創出、寛仁4年（1020）無量寿院創建）
- ・藤原頼通創建の平等院（極楽世界之儀を移す、永承7年（1052））
- ・平等院と宇治の都市形成
- ・白河天皇創建の法勝寺（王家の氏寺、承暦1年（1077）七間四面重層裳階付き緑釉瓦葺きの巨大金堂創建）
- ・白河殿と鳥羽離宮
- ・巨大建築群を統合する浄土教伽藍の流れ ⇒ 法成寺系浄土庭園伽藍
- ・浄土の景観再現を指向する浄土教伽藍の流れ ⇒ 平等院系浄土庭園伽藍

## 3. 平泉の都市形成と京都・宇治

- ・平泉の都市形成と特色
- ・平泉の都市計画と白河・宇治

## 4. 世界遺産として



図 1 秀衡期の平泉想定図 (羽柴直人氏作図引用)



図 2 毛越寺の平面図 (藤原基衡建立 本尊丈六薬師如来 平泉町報告書より)



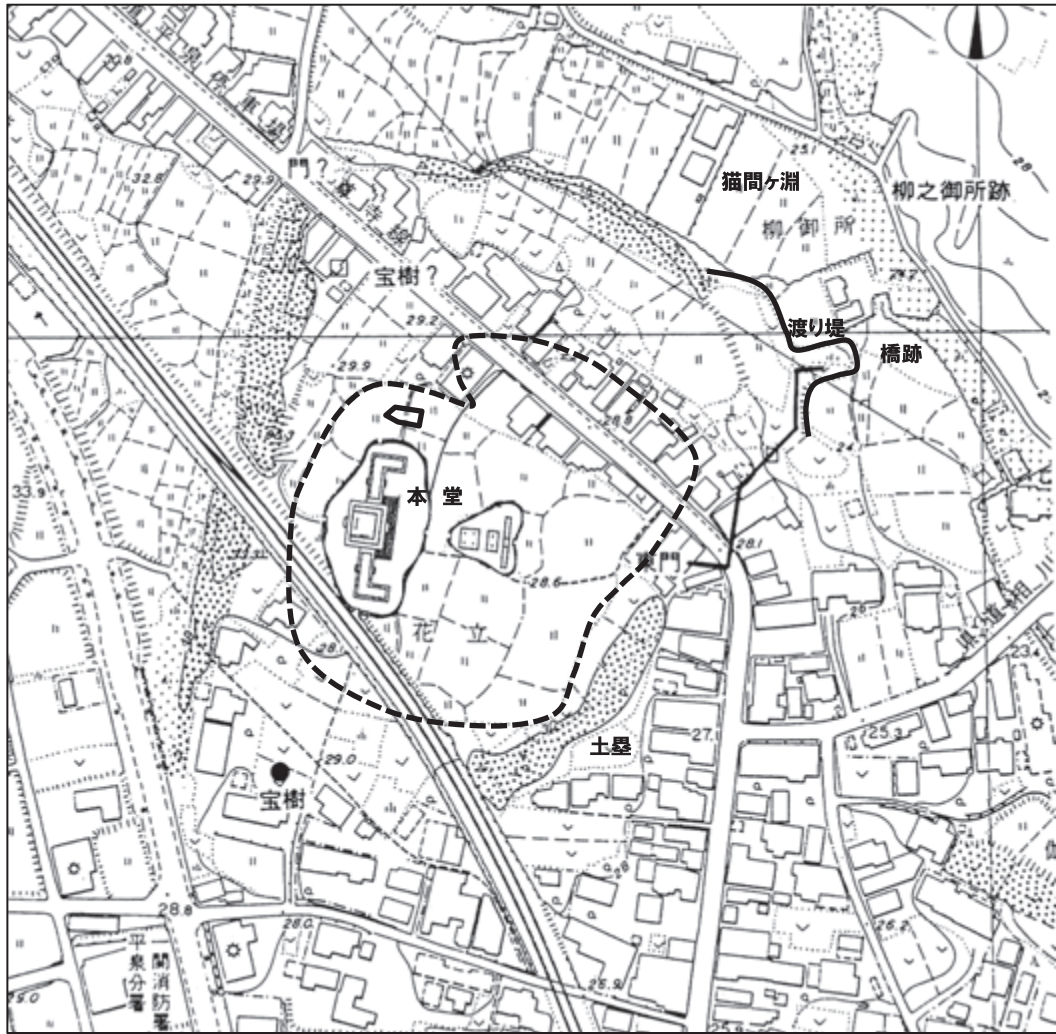


図 3 無量光院跡の地形図(平泉町報告書に加筆)

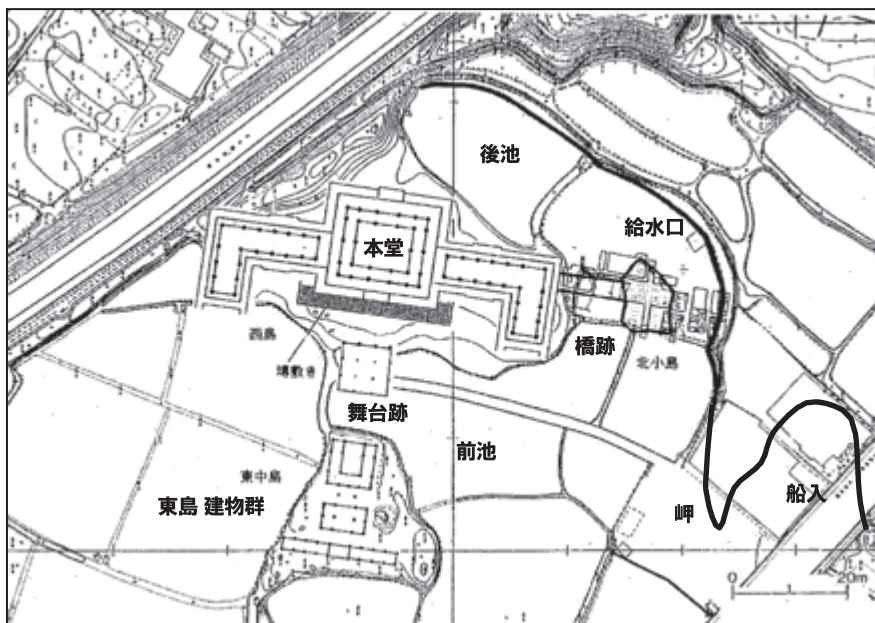
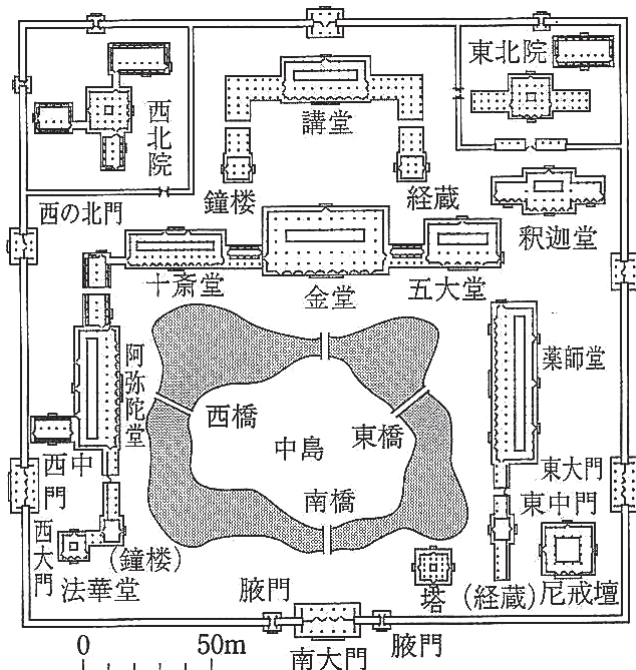
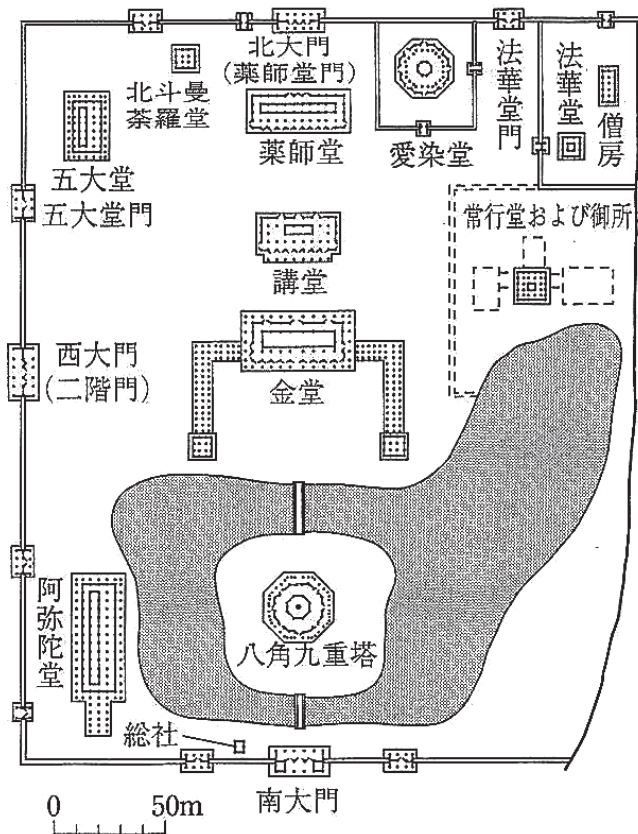


図 4 無量光院跡(藤原秀衡建立 本尊丈六阿弥陀如来 平泉町報告書に加筆)



堂	造営年	安置仏
阿彌陀堂	寛仁4年 (1020)	1丈6尺九体阿彌陀如来、観音・勢至菩薩、四天王
新阿彌陀堂	万寿3年 (1026)	
十齋堂	寛仁4年 (1020)	1丈6尺十齋仏10余体
金堂	治安2年 (1022)	3丈2尺大日如来、2丈釈迦・薬師如来・文殊師利・弥勒菩薩、9尺梵天・帝釈天・四天王
五大堂	治安2年 (1022)	2丈不動明王、1丈6尺四大尊
薬師堂	万寿1年 (1024)	1丈6尺七仏薬師如来・六観音菩薩、1丈日光・月光菩薩、8尺十二神将
釈迦堂	万寿4年 (1027)	1丈6尺釈迦如来、6尺梵天・帝釈天・四天王、十大弟子、八部衆、等身釈迦如来100体
講堂	永承5年 (1057)	2丈3尺大日如来、1丈6尺釈迦如来・不空罽索観音・大威徳明王・薬師如来・延命仏・不動明王

図5 京 法成寺伽藍配置想定図（藤原道長建立 金堂本尊 3丈2尺大日如来 清水攝氏復元）



堂	造営年	安置仏
金堂	承暦1年 (1077)	3丈2尺毘盧遮那仏 2丈多宝・開敷花・無量寿・天鼓雷音、9尺六天像
講堂		2丈釈迦如来像、1丈6尺普賢・文殊菩薩
阿彌陀堂		1丈6尺九体阿彌陀 1丈観音・勢至菩薩
五大堂		2丈6尺不動尊 1丈6尺四大尊像
薬師堂	永保3年 (1083)	1丈6尺七仏薬師像
九重塔	永保3年 (1083)	8尺大日如来ほか五智如来

図6 京 法勝寺伽藍配置想定図（白河天皇建立 金堂本尊 3丈2尺毘盧遮那仏 富島義幸氏復元）  
法勝寺八角九重塔は高さ27丈（約81m）。この高さの建物は今の京都にもない。



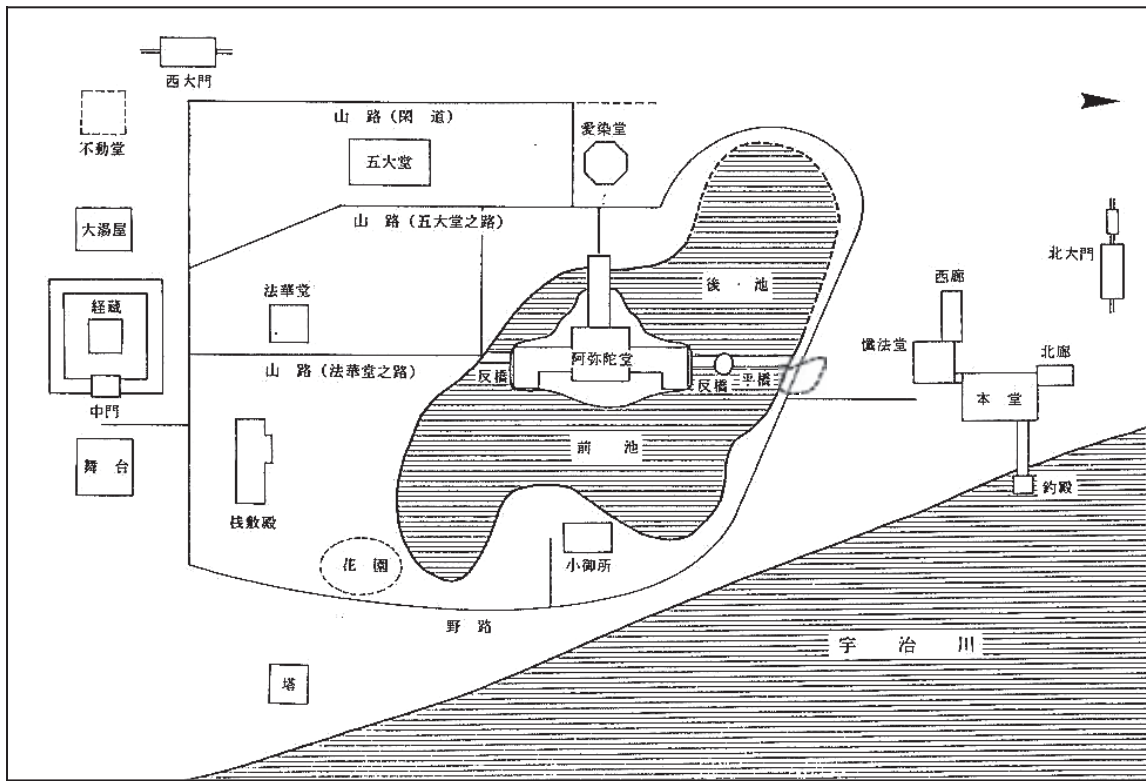


図 7 宇治 平等院伽藍配置想定図 (藤原頼通建立 本尊丈六阿弥陀如来 杉本復元)

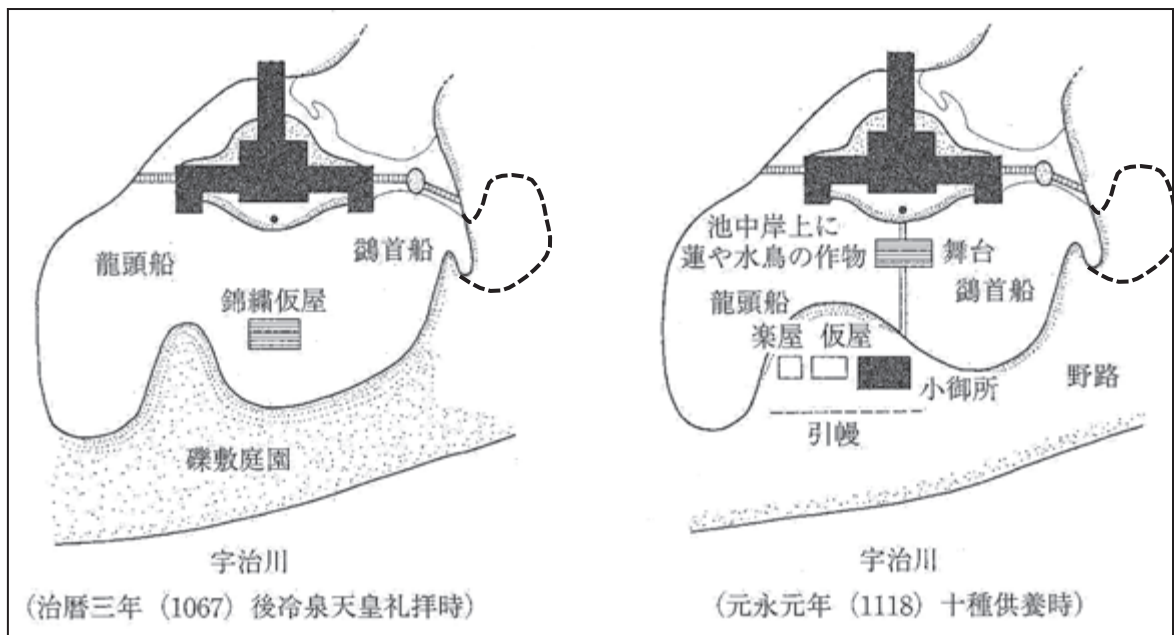


図 8 鳳凰堂における法会のしつらえ (杉本復元)

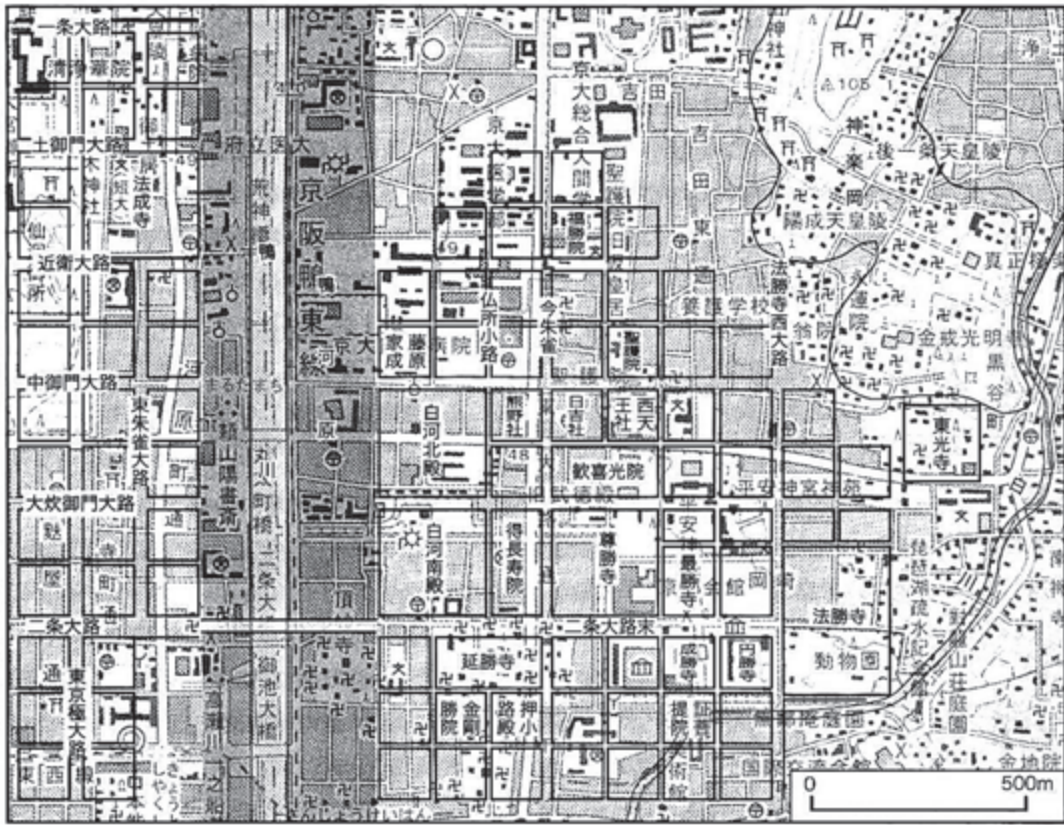


図 9 京 12 世紀における白河の施設配置(山田邦和氏作図)

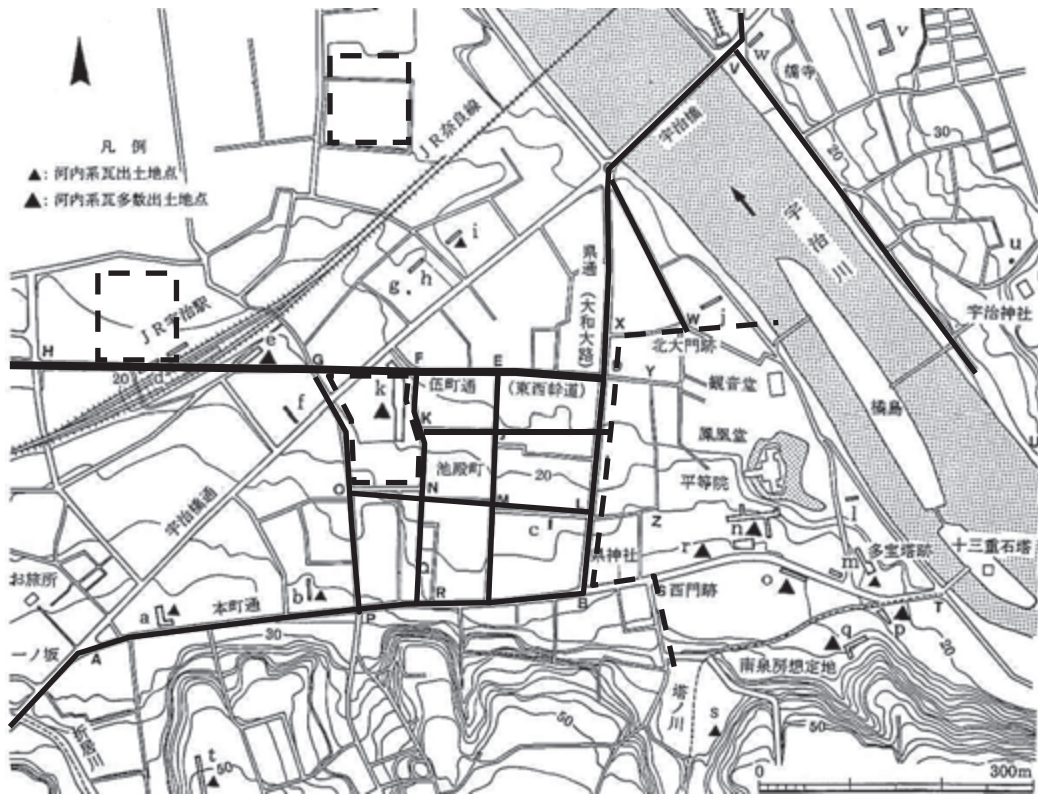


図 10 宇治における 11~12 世紀の邸宅等遺構と街区(杉本作図)





## 第2章 柳之御所の発掘調査—1980年代末

### (1) 大きなインパクト

- ①二重の堀
  - ②大量のかわらけ
  - ③建物群
  - ④池
  - ⑤折敷の建物の絵
- ・それぞれについて
    - ①堀について
      - ・京都風のイメージとは逆の軍事的なイメージ
      - ・その前史…安倍氏の鳥海柵、清原氏の大鳥井山遺跡からの系譜
    - ②③④について
      - ・奥州藤原氏たちの生活していた建物が出現し、池も付属している
      - ・大量のかわらけ→儀礼的な宴会を行っていた
      - ・京都の貴族の同様な生活スタイル
    - ⑤折敷の絵
      - ・寝殿造り風の建物が描かれている
      - ・柳之御所に寝殿造りの建物が推測される

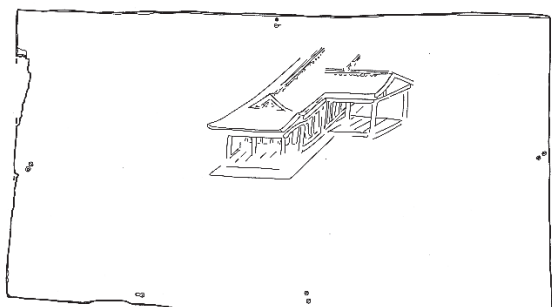


図2 折敷に描かれた建物 埋-2080

### (2) 研究が一気に進展

- ①従来の研究は寺院中心で、奥州藤原氏の実態はよくわからなかった  
→一気に、その実像が現れた…中世考古学の盛り上がりとマッチ
- ②古代からの系譜を研究する必要性…堀の系譜
- ③長者ヶ原廃寺跡との系譜
- ④宴会や建築の実態が明らかに

### (3) 奥州藤原氏のイメージも変化

- ①京都風の華麗に寺院群とは反対に、軍事的な要素…堀の系譜
  - ②宴会儀礼の存在から貴族的な生活スタイル…大量のかわらけ
  - ③建物跡は寝殿造そのものとは異なっている…地方武士の居館との類似性
- ☆単に貴族的な生活を享受していただけではなく地方武士の要素も存在  
→寺院群と対照的な要素…奥州藤原氏の実像が明らかになってきた

### 第3章 中世都市論と平泉

#### (1) 中世都市として

① 中世都市として注目

② 考古学的な成果

・ 道路や宅地の把握

・ 時間の経過の中で変化が見える

・ 清衡期→基衡期→秀衡・泰衡期の変遷

→都市の形成過程がわかるようになった

#### (2) 古代都市から中世都市へ

① 古代の都城制・国府とのつながり・・・都市とは何か？

② 日本史における都市の本格的な誕生・・・都城制の導入→藤原京・平城京

③ 地方の都市が国府・・・城壁で囲まれず、各施設がバラバラに散在

→しかし、こうしたものを都市と見ることに疑問も

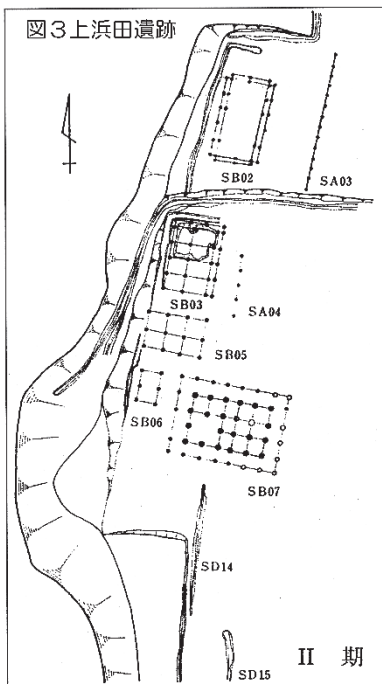


図4 平泉Ⅰ期



図5 平泉Ⅲ期

#### (3) 平泉では

・ 柳之御所・・・政治

・ 中尊寺などの寺院・・・宗教

・ 骨寺地区や白鳥館遺跡・・・経済・生産

・ 達谷窟・・・入り口のランドマーク

→① 計画的な道路遺構

② 宗教施設との配置計画

③ 経済的機能

※ 長者ヶ原廃寺跡・衣川地区などの前史を前提に展開している点も重要

#### (4) 日本的な都市

- ①各機能・施設を適した場所に配置→都市機能を充足
- ②一見、散在しているように見えるが全体で都市としての機能を果たしている
- ③平泉の都市としての展開
  - ・清衡期・・・居館・中尊寺を中心に
  - ・基衡期・・・求心力の増大によって軸線道路を設定して町割りを作る
  - ・秀衡・泰衡期・・・さらに充実

☆平泉・・・中世都市の先駆的な形態・・・日本的な都市の形

#### まとめと課題

- ①柳之御所の発掘調査を機に、平泉と奥州藤原氏の実像が明らかになってきた  
→伝説から実像へ
- ②奥州藤原氏の実態が見えてきた  
→京都風の寺院を造営する一方で地方武士としての面も持っていた
- ③平泉が中世都市の先駆的な形態として発展していく過程が追えるようになった  
→それを通して日本的な都市の分析につながった

#### ○課題も

- ①恐らく規模の大小はあるが同様の地方武士たちがいた→比較検討
- ②翻って寝殿造りとは何か、武士の住宅建築とはどのように復元できるのか？

#### 〔主な参考文献〕

平泉文化研究会『奥州藤原氏と柳之御所跡』吉川弘文館、1992年  
齊藤利男『平泉 よみがえる中世都市』岩波書店、1992年  
平泉文化研究会『日本史の中の柳之御所跡』吉川弘文館、1993年  
大平聡「堀の系譜」、佐藤信他編『城と館を掘る・読む』山川出版社、1994年  
大石直正『奥州藤原氏の時代』吉川弘文館、2001年  
入間田宣夫・本澤慎輔編『平泉の世界』高志書院、2002年  
入間田宣夫『平泉の政治と仏教』高志書院、2013年  
大矢邦宣『図説平泉 浄土をめざしたみちのくの都』河出書房新社、2013年  
齊藤利男『平泉 北方王国の夢』講談社、2014年  
吉田歆『日中古代都城と中世都市平泉』汲古書院、2014年  
八重樫忠郎『北のつわものの都 平泉』新泉社、2015年  
柳原敏昭編『東北の中世史1 平泉の光芒』吉川弘文、2015年  
菅野成寛編『中尊寺と平泉をめぐる』小学館、2018年

#### 〔図版出典〕

図1：大矢邦宣『図説平泉 浄土をめざしたみちのくの都』河出書房新社、2013年  
図2・4・5：岩手県教育委員会『岩手県文化財調査報告書第155集 平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所遺跡一堀内部地区内容確認調査一本文編』2019年  
図3：神奈川県教育委員会『神奈川県埋蔵文化財調査報告15 上浜田遺跡』1979年



## アジア史の新たな展開——平泉の歴史的意義——

大阪市立大学大学 渡辺 健哉

### はじめに

これまで報告者は（渡辺 2018）と（渡辺 2019）を公表した。前者は、（岩手県教育委員会ほか〔編〕2016）を利用しつつ、平泉＝辺境の都城、柳之御所遺跡＝為政者の居住空間、達谷窟＝境界を示す象徴、長者ヶ原廃寺跡＝都市内の寺院、白鳥館遺跡＝交流拠点、骨寺村荘園遺跡＝寺院の資産、とそれぞれを見立てて、東アジアのほかの遺跡と比定しながら、その歴史的意義を明らかにした。後者は、平泉研究において先駆的な役割を果たした藤島亥治郎の、研究の動機とその研究の背景にある「東アジアの視点」の存在を明らかにした。いずれも、自らの研究テーマである、元の大都の都城研究を敷衍した研究と、常盤大定に代表される史学史的関心から展開させた研究といえる。

本報告は、平泉の同時代の東アジアの諸都市との比較を行っていく。すでに「平泉を東アジア史のなかで記述する試みは新しくない」と佐藤嘉広氏が喝破しているように（佐藤 2013）、こうした視点は藤島の研究でも言及されており（渡辺 2019）、とりたてて目新しいものではない。

しかしながら、2011年6月の「平泉の文化遺産」の世界遺産一覧表への登録によって、平泉が改めて注目を集めたのは疑いないことであり、平泉を東アジア史のなかに改めて位置づけ、考察を加える意義が薄れるとは考えにくい。

そこで本報告では、「境界都市（境域都市）」という概念に着目し、ユーラシア東方域の「境域」で活動し、近年になって急速に研究が進展してきた遼・金時代の都市に注目し、そこから抽出される特徴を平泉に位置づけながら比較・検討を行う。

### 1) 「境界都市」について

近年、妹尾達彦氏は「境界都市」という概念を用いて世界史の概述を試みている。「境界都市」について、妹尾氏の説明を整理すれば、以下のようになる（妹尾 2018, pp11-18）。

- ・環境の境域に立地する都市。
- ・異なる共同体の間に位置する都市であるため、外交、軍事、経済、行政機能に優れた都市。
- ・環境の異なる産物と情報が集積し交換されるので、経済、文化機能にも長けている。主張する。

また、平泉を南の日本社会と北の蝦夷世界との境界に生まれた「辺境政権」として位置づける見解がある。とくに（斉藤 2014, 24 頁）で示された北緯 39 度線と 40 度線の位置は、平泉を東アジアに位置づけるうえでも、極めて重要な視点といえる。なぜなら、中国の北の遊牧世界と南の農耕世界との接点に位置づけられる北京こそ、まさに北緯 40 度に位置しているからである。今後深めるべき検討課題として、この地帯の植生を起点とする、動植物の生態環境の解明も望まれる。発掘報告で提示される、動植物の種や骨にはいかなる意味があるのかについて、考えてみたい。

さて、東アジアに平泉を位置づけるにあたって、藤原三代が権力を掌握した 1100 年からおよそ百年のあいだ——中国大陸では、南宋・遼・金——は中華世界が南北に分裂していた時代である、という点については改めて注意を払いたい。それにより、この時期は相互に交渉を行う必要性から、必然的に二つの領域の接点に交易・交渉を行うための都市が誕生した。平泉が形成されていく過程で、目を東部ユーラシアに転ずると、複数の王朝が対峙する時代が現出していたのである。

こうした点を踏まえて、遼・金代の都市を概観していきたい。

## 2) 遼の都市

遼・金の王朝では皇帝自身が移動（巡幸）を繰り返す。すなわち、皇帝は季節に応じて移動を行いながら、都城の外で生活を行う。この行動様式にもなって都の在り方も従来のそれとは大きく異なった。

まず、遼の五京は、以下のとおりである。

【上京臨潢府】（現在、内モンゴル自治区赤峰市巴林左旗）

【南京→のちの東京遼陽府】（現在、遼寧省遼陽市）

【中京大定府】（現在、内モンゴル自治区赤峰市寧城県）

【南京析津府】（現在、北京市）

【西京大同府】（現在、山西省大同市）

## 3) 金の都市

遼の次の金代の都市についても同じように整理する。

【上京会寧府】（現在、黒竜江省阿城市南白城）

【東京遼陽府】（現在、遼寧省遼陽市）

【北京大定府】（現在、内モンゴル自治区赤峰市寧城県）

【上京→のちの北京臨潢府】（現在、内モンゴル自治区赤峰市巴林左旗）

【南京大興府のちの中都大興府】（現在、北京市西南部）

【西京大同府】（現在、山西省大同市）

【南京開封府】（現在、河南省開封市）

【中京金昌府】（現在、河南省洛陽市）

## おわりに

- ・境界に都市が生まれる背景
- ・そしてそこに表出する複数の特徴
- ・中心と辺境⇒⇒むしろ相対化する必要

【ここでは日本語の主要参考文献のみを挙げておく】

荒川慎太郎ほか〔編著〕（2013）：『契丹〔遼〕と一〇～一二世紀の東部ユーラシア』勉誠出版

岩手県教育委員会ほか〔編〕（2016）：『アジアにおける平泉文化 資料集』岩手県教育委員会

岩手大学平泉文化研究センター〔監修〕（2019）：『貿易陶磁器と東アジアの物流——平泉・博多・中国』高志書店

菅野成寛（2015）：「平泉文化の歴史的意義」柳原敏昭〔編〕『東北の中世史① 平泉の光芒』吉川弘文館

斉藤利男（2014）：『平泉——北方王国の夢』講談社

———（2016）：「未完の北方王国——「日本国」と平泉政権」歴史評論 795

佐藤嘉広（2013）：「平泉の「都市」計画と園池造営」藪〔編著〕2013

- 妹尾達彦 (2006) : 「中国の都城とアジア世界」『シリーズ都市・建築・歴史 (1)』東京大学出版会  
—— (2016) : 「世界史の中の平泉」『歴史評論』795  
—— (2018) : 『グローバル・ヒストリー』中央大学出版部
- 武田和哉〔編著〕(2006) : 『草原の王朝・契丹国(遼朝)の遺跡と文物』勉誠出版
- 中澤寛将 (2017) : 「北東アジアからみた平泉文化の特質」『平泉文化研究年報』17  
—— (2018) : 「北東アジアの都市からみた平泉の特質」『平泉文化研究年報』18
- 古松崇志ほか〔編著〕(2019) : 『金・女真の歴史とユーラシア東方』勉誠出版
- 柳原敏昭〔編著〕(2015) 『東北の中世史① 平泉の光芒』吉川弘文館
- 藪敏裕〔編著〕(2013) : 『平泉文化の国際性と地域性』汲古書院
- 吉田敏 (2011) : 『古代の都はどうつくられたか——中国・日本・朝鮮・渤海』吉川弘文館  
—— (2014) : 『日中古代都城と中世都市平泉』汲古書院
- 渡辺健哉 (2017) : 『元大都形成史の研究——首都北京の原型』東北大学出版会  
—— (2018) : 「東アジアにおける平泉遺跡群の歴史的な位置づけ」『平泉文化研究年報』18  
—— (2019) : 「平泉研究の展開と藤島亥治郎」『平泉文化研究年報』19